

# ラムサール条約、中池見湿地を歩く

中部環境を考える会(中環)の北陸湿地視察へ参加したので報告する。中環は毎年、視察旅行を実施している。現地に足を運び、目と耳と肌で環境問題を感じ考えると同時に、人と人とのつながり、現地の方々との出会い、会員同士との交流を大事にしている。そして現地の食、酒を堪能するのはいうまでもない。中環が「中観(光)」と言われるゆえんだ。今回の旅では、北陸の風雪に耐えて咲く水仙のような方々と出会うことができた。

CANレポーター 大村昌宏

## 北陸道とおろしソバ



第一日目 4月20日(土)金山駅前に9名が集合、マイクロバスに乗り込んで北陸道を一路、敦賀市へ。敦賀駅前、長靴をはきリュックを背負ったレイチェルカーソン風の女性をピックアップ。彼女は、NPO ウェットランド中池見会長の佐々木智恵子さん。中池見湿地の保全とラムサール条約の登録に尽力されてきた方だ。佐々木さんの案内でまず気比の松原へ。松原を背にすると波穏やかな敦賀湾が広がる。古くは大陸と韓半島との交易の拠点として栄えた。左手の敦賀半島には、現在 7機の原発が林立し原発半島とも呼ばれている。佐々木さんによると笙川を挟んで西側と東側とは地質が違い、植生も違うという。現在も断層が動いている地形であることが読み取れる。

まずは腹ごしらえと佐々木さんの案内で地元のそば屋へ。そこで食したのが「おろしソバ」。大きな器にどかっとならぶが入っており大根おろしがぶっかけてある。そのボリューム感たりや半端ではない。大根のほろ苦さとソバとつゆの味が絶妙だった。

## ラムサール条約 中池見湿地

### 12 万年の気候変動の記録

市街地から一山すり抜けると、すぐに中池見湿地だ。四方を山に囲まれ、手のひらのような形をした中池見湿地。手元の所から小川が流れ出している。佐々木さんは、ザブザブと小川に入り生物を紹介する。中池見湿地には、流れ込む河川はなく、雨水と山からの湧き水が水源。湿地の水環境は多様で、生物がそれぞれ棲み分けをしているとのこと。トンボの種類が多く、平家ボタルの棲息地でもある。

少し歩くとNPO ウェットランド中池見の小屋が見えてきた。20数年、佐々木さんらは、ここを拠点に中池見湿地の保全運動に取り組み組んできた。同時に、地域の子供達に「五感で触れあえる野外の博物館」「フィールドミュージアム」を開催してきている。



中池見湿地はもともと水田だったところが、耕作放棄により湿地にもどった。何度も危機があった。最大の危機は、1992年の大阪ガスによるガスタンク基地構

想。笹木さん達は、ナショナルトラスト運動で守り抜いた。多くの科学者の協力をえて、中池見湿地の価値を社会に訴えた。その結果、大阪ガスは、2005年、数億円の持参金をつけて、敦賀市に寄贈した。そして2012年、ラムサール条約湿地に登録された。登録の決め手は、生物の多様性と泥炭層。中池見湿地は、見えていないところにも大きな価値がある。地下40mにおよぶ泥炭層。ここには、12億年分の気候変動が記録されている。泥炭の各層に含まれている花粉や実などから当時の植生が推測される。同じ福井県の水月湖の年縞が世界的に注目されているが、同様の価値がこの湿地にあり、同じような地殻変動が億年単位でおきているということだろうか。



現在、この中池見湿地は新たな危機に直面している。一つは北陸新幹線のルートが湿地の唯一の水の出口である手元を横切り遮ることだ。トンネルの上部が地表から露出する形になる。このことにより泥炭層の保存状態に大きな変化がでないか、地表の生物の多様性が阻害されないかと心配される。

もう一つの危機は、敦賀市の環境行政の姿勢だ。市の所有物だからと生物多様性やラムサール条約の基本的な認識のない管理者が、次々と問題を引き起こしているとのことだ。「市の持ち物だから」(市のムラの論理で)という発想なのだろう。象徴的なのがバイパス側に新たに作られた施設。市の委託を受けた別のNPOが施設を運営している。展示用にと植生を無視して勝手に移植するなど、生物の多様性を破壊。ここ

のカラー刷りの立派なパンフには、保全運動の経過やウエットランド中池見の小屋は一切記載されていなかった。善意を装いながら、保全運動の分断をはかっているかにみえる。

多くの科学者、専門家の善意の協力をえて保全運動に取り組んできただけに、このままではと佐々木さんは頭をかかえていた。

## 伝説の池のある池河内湿地へ

山の奥、また奥、車は山道をどんどん登り標高をかせいでいく。運転手さんに「山道、大丈夫ですか」と思わず聞いてしまった。標高300mに湿地が広がる。ハンノキが湿原の一面に茂っている。ここには、阿原ヶ池の大蛇の伝説があるそうだ。小雨の中、木道を歩く。



## コウノトリが舞う里

二日目、4月21日(日)。寒風の中をコウノトリのゲージのある施設に向かって歩く。コウノトリを呼び戻す農法の看板があった。ゲージの中ではコウノトリが卵を抱えていた。(後日雛が孵ったとの情報あり)



越前市エコビレッジ交流センターでは、長野義春さんが出迎えてくれた。長野さんは、これまで生物多様性条約についてかかわってこられた方。越前市に招聘されたとの事だ。エコビレッジセンターの屋上に登り、山間部に棚田が広がる里山を眺望する。水田と木々の緑、心が穏やかになる。これが日本の里山の原風景だ。ビオトープの池でタモですくうとドジョウが入っていた、子どもの頃にもどった。水田の中の池、普通にある田んぼ。しかしこれが失われてしまったという事か。



「コウノトリがやってくるような里にしよう」長野さんらの発想は素敵だった。

## 原発と環境施設

今回の旅で、北陸の自然の豊かさと人々の温かさ

を感じる事ができた。そして今ある矛盾も考えさせられた。うかがった地域の公共施設、建物は立派だった。



福井県には原発が林立する。原発の立地と引き換えに自治体に入ってきた原発マネー。そのお金によって環境施設や文化使節が充実する事ができた。しかし、原発で過酷事故が起きれば、ひとたまりもない。フクシマの現実は、それを事実でもって示している。



## 迫る山、冬は荒れる日本海

越前の海岸を見ただけでその厳しさが分かる。迫る山と高い防波堤とテトラポット。冬には大波が押し寄せ、横殴りの風が吹く。越前岬の水仙が、厳しい環境の中で清楚な花を咲かせる。

→「中池見湿地」NPO法人ウエットランド中池見

<http://nakaikemi.com/>

→「コウノトリの舞う里づくり」越前市

<http://www.city.echizen.lg.jp/office/060/020/kounotorimausato.html>